



●発行元 人文ネットワーク ●印刷 (株)新栄堂 ●事務局 (株)新評論編集室内(担当:吉住) 〒169-0051 新宿区西早稲田3-16-28 Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832 〆 jinbun-net@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性にのみ腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。ご了承ください。

巻頭インタビュー

新著『眠られぬ労働者たち——新しきサンディカの思考』の著者 入江公康氏に聞く ◆聞き手=白石嘉治

共にあること、さらに群衆となること



いりえ・きみやす
1967年生まれ。早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程後期単位取得退学。現在、大学・専門学校非常勤講師。専攻は社会学、労働運動史、社会政策。共著に『ネオリベ現代生活批判序説』。新著に収録されたもの以外の論文に「複雑化する権力／純化する「心」(渋谷望との共著『現代思想』2003/4)、「クルド難民家族に訊く」(同共著『現代思想』2004/9)、「「能動的」賃金、回帰する政治——賃金闘争史をベーシック・インカムに」(『VOL』2号 2007/5)、「詩を撒く」(『現代思想』2007/12 臨増=戦後民衆精神史)など。

—入江さんには『ネオリベ現代生活批判序説』の冒頭で話していただきました。その後の議論の深まりが今度の『眠られぬ労働者たち』には随所にみられますが、とりわけ副題の「新しきサンディカの思考」についてうかがいたい。なぜ「組合」ではなく「サンディカ」なのでしょう？

既存の「組合」の名を冠した団体の多くが「敵」である企業に似てしまっています。そこからの離脱の意味で「サンディカ」という言葉を蘇生させ、人の集合に生を与えてみたかった。それは何か群れのようなものを基底においた、雑多性や混然性をもった集合状態であり、制度から逸脱する自由さを持ち、人が遭遇し群れるがゆえ、そこでは欲望が交錯し交配する、だからこそ何かを生む、そういう状態。しかも無意識を排除しない。現状では群衆や群れることは禁止され取締りの対象ですらある。それだけ危険でありポテンシャルがあるということですね。

—そうした群衆状態は、情動的なものに根ざすことが語られています。

「情動」とは人を駆動させる何かです。幾多ある人の集合において、それは「群れ」においてこそその固有性が保存されるのだと思う。「夜」「痙攣」というのは、ここではそれを介し伝えられる、いわば身体を通じた情動の経路ですが人が「変態」しうることの契機ともなる。そして「残存」とは、まだ絡め取られていない、その寸前の、鹵獲されそうなその手前にあるもの。しつこくこびりつく「残り滓」ということです。だからこそ、その執拗さゆえ、われわれはそれらを「ユートピア」への「脱出」口としなければならない。

—ただしネオリベな社会では、情動のユートピア的な契機は見失われ、むしろ「低強度」の戦争状態にある、と。

生活を破壊し、生活全般に踏み込んでくるような管理や取締り強化を比喩的にであれ「低強度戦争」と呼んでみた。シュミットなどはパルチザン、すなわち「非正規」軍を考慮した戦争分析の重要性を説いたけど、国家・資本はそうしたパルチザン(=非正規)が怖くて仕方がないわけで、これをどう押さえ込んでおくかに目を血走らせ躍起になっているのだともいえる。そういう「軍事」的考察も必要だと。

—具体的には医療と教育が標的となっています。そして主戦場は大学です。大学は医者養成し、教員と教材をつうじて教育の全過程にかかわりますから。

「大学」は恢復されないといけない。「学生」も資本とは切り離された固有の存在として考えられるべき。学生というだけで非難される筋合いなどなく、「奨学金」という名の借金を背負う必要もない。大学の現況は、古典、歴史、哲学を学んだり、無為の中でまったく違ったことを考えてみたりする、そのような時間が蔑ろにされてるのも同様。本当に無惨です。俗悪な企業スノビズムの侵入を許し、ともかく大学の現状の目を覆わんばかりの貧しさはわれわれ自身の貧しさを物語る。その貧しさの最たるものが学費の犯罪的な高額化でしょう。

—さいごに、さしせまった洞爺湖サミット、あるいは「サミット体制」について。

70年代、ニクソンショックをへてドルが変動相場制に切り替わり、資本自由化が本格的に開始されるなか、先進国を中心にサミットは始まった。したがってそれは金持ち国家、金融資本や独占企業に後押しされた国家の「談合」体制ということです。90年代、サミットに反対する運動は、この体制の犯罪性を暴露し抑止すると同時に、国際連帯や民主的な世界の展望を兆すような創造的な契機をもちました。だが、このような実践は日本では知られているとはいえない。日本の閉塞感がいわれ、それを嘆く意見をききますが、端的にいって思想的な営為が反サミットのような実践に開かれていないだけでは。これを機会に、この国にも世界の新たな息吹を吹き込めたいと思う。(2008.5.19)

眠られぬ労働者たち 新しきサンディカの思考

入江公康 著 青土社 2008/3刊 232頁 1995円

“現実的なのもの専制”を切り崩す思考・感性とは何か。ポストフォーディズム、グローバリゼーション、そしてネオリベリズム…虚ろな消費と競争の連鎖の中で、裏切られ続ける労働者たち。眠ることすらできない者たちに現実への蜂起をうながす新しい闘争のための理論。

増補 ネオリベ現代生活批判序説

白石嘉治・大野英士 編/入江公康・櫻村愛子・矢部史郎・岡山茂・堅田香緒里 談
新評論 2008/4刊 320頁 2520円

「現代日本を読み解くバイブル」(雨宮処凛)、「日本ではじめてのネオリベ時代の日常生活批判の手引書」(酒井隆史)。各氏へのインタビューを軸とした2005年旧版に、「堅田香緒里氏に聞く=ベーシックインカムを語ることの喜び」、「白石嘉治講演=学費0円へ」を増補。



『眠られぬ労働者たち』

『増補 ネオリベ現代生活批判序説』

「彼らは昼間働いていたことを忘れ、静かに眠って明日のための力を貯えておくことはしない」。つまり、彼らにとって夜の活動とは、たとえ昼の労働がどうなるうとも、まずもって追求されるべき事柄であり、そのエネルギーを、生命力をそれら夜の活動に費消しつくそうと躍起になるというこのことを忘れるべきではなからう。奴隷たちは夜についで、そこで敬虔さをまとい、そして舞踏している。
(『眠られぬ労働者たち』所収、『眠れぬ人びとについて』p. 194)

新たな「敵」の姿

入江小康 「敵」の研究とでもいうのでしょうか、私はもともと戦前の右派の労働運動史が専門です。

『眠られぬ労働者たち』はこの3年ほどのあいだに『現代思想』誌に発表した論考をまとめたもの。そこで自由に書かせてもらったのは有り難かった。書きぶりが「無産的」「純文学的」ともいわれましたが正直うれしかった。書き手としてはそういう忝意をもってやったつもりではなかった。

ところで、「敵」の

わかりづらさ、あるいはわかっているけど名指せない、そのことが現在の問題なのだと思います。この間の新自由主義の猛威はいわば「寝返り」の論理を内に孕むものであったし、生産のフレキシブル化

を伴ったポストフォーディズム的な労働形態の浸透は「階級闘争」を困難にするものです。資本主義は生産様式自体を変更し、新たな蓄積の形態を創出しています。したがって敵の姿を種別化し、そして新たな闘争がもつと模索されねばならないのですが、この本は「ストライキ」や「サボタージュ」を本気で呼びかけている近年稀な本の一つなのだと思っています。われわれはストライキ可能な思考と身体をもっているのか。「鉄を喰い」「詩を撒く」労働者でありうるのか。もしそうでないなら、それはなぜか。潤沢な過去よりイマジネーションを喚起しつつ、しかも従来の轍に脚をとられることなく、新たな展望を思い描くべきなのでしょう。そしてそれはフィクショナルな契機を孕んでいい。それともつながるのですが、知識資本主義といわれるなか、「学生」を主題化する必要も感じています。

イマジネーションの賭け

大野英士 『眠られぬ労働者たち』は社会学にとどまらない、多彩な文献の参照が非常に新鮮です。たとえば文学から「食鉄人(アパッチ)」を引くことで、闘争のための異質な肉体を獲得していくというイメージが練り上げられる。それは闘争が日常性に吸収されることへの抵抗です。闘いの扇情的なイメージである

と同時に、日常性のロジックを破壊していくバネとなるような、イマジネーションの賭けが存在しています。

白石嘉治 入江さんの本を読んで、本は社会と敵対するものだと思いたてて思いました。それは大野さんのいう、日常性とイマジネーションの創造的な敵対性といいかけてもいい。そして今日、何らかの危機があるとすれば、本やイマジネーションにたいする社会や日常性の肥大がその本質なのだと思う。

だから「社会」という言葉の浮上には警戒しなければならない。いわゆる「格差社会」批判の文脈で、たとえば社会的な「絆」の強化がうたわれる。でも、そうした社会化の要請も、コミュニケーションという交換の論理のなかにあって、この世界に悲惨をもたらしている市場原理と同根です。

『ネオリベ現代生活批判序説』の結論は大学の無償化とベーシックインカムでした。今回の増補版でも、この二点にかんするインタビューと講演録を付け加えました。もはや新自由主義の失敗は誰の目にもあきらかです。求められているのは、交換の論理の外部を示すイメージであり、大学の無償化やベーシックインカムは、ストライキやサボタージュの呼びかけと同様に、われわれに脱出への方向づけをあたえるのだと思います。

生存・国家・自由**■ 桑田禮彰 (駒澤大学教員/現代思想)**

脅かされる生存は、国家に対する自由という枠組みの中で考察する必要がある。

ヨーロッパ近代の政治哲学は、個人の「生存と自由」を原理とする国家論・社会論である。そこにおいて「自由」とは個人の「生存のための自由」であり、国家・社会もその「生存のための自由」のための「契約」として弁証され、「生存のための自由」が国家・社会の存在理由となり、その結果、「生存のための国家」と「生存のための自由」の対立が生じる。

既にホブズの場合、自然権は端的に「自分の自然=生命の維持のために自分の意志するように自分自身の力を使用する各人の自由」と定義される(『リヴァイアサン』1651)。この力もまた自然=生命であり、各人に平等に与えられていることから相互不信が生じあふ「万人の万人に対する闘争」に至ることを避けるために、人工的な国家=リヴァイアサンの構築が不可避とされる。ここでは個人の自己保存が目的・力として立論の大前提の位置に置かれ、そのための自由が国家権力に対し「思想・信仰の自由」として認められている(カール・シュミットはここにリヴァイアサンの最初の亀裂を見た)。

スピノザになるとこの自己保存は、「[自己の存在に固執する]努力 conatus」(=生命的衝動)と捉えかえされ、「全自然の秩序」と一致する「人間の本質そのもの」と同定されて、この力の優れた発揮のための自由が語られ(『エチカ』1677)、「思想・信仰・言論の自由」が明確に主張される(『神学政治論』1670)(シュミットはここにリヴァイアサンの致命的な亀裂の拡大を見た)。

この《生存・国家・自由》という問題構成の枠組みは、現在も有効である。

資本と生活**■ 土屋進 (中央大学他教員/現代思想)**

植物は生存に必要な全てのものをその場にとどまったままで隣接した環境から受け取る。言い換えるなら、植物の生活世界は、植物自身の不動の一視点から構成される風景画のような静態空間といえる。

しかし移動という特性をもった動物は、植物とは異なる生活空間を組織する。移動の速度と方向によってさまざまな形に作りあげられる生活空間は、ルフェーブルのいう「産出された」空間であり、自らの移動によって自由に形を変えていく可塑的空間だ。そこでは全ての事物が自らの移動の速度と経路によって再配置され、目前に広がる風景空間とは違う新たなメタ空間を生み出していく。

しかし資本は第三の全く異なる空間を生み出した。交換価値という普遍則が支配する資本主義社会では、現実とのインターフェイスを剥奪された第三の空間によって生活の組織化が始まる。交換価値を成り立たせているのは、事物の固有性ではなく、閉ざされたシステムの中に置かれた事物の差異だ。人間が作り出したこの純粋な記号空間が実体として機能し始め、そこに“未来の時間”や“他者”へと開かれた「固有性」を剥奪されたものが全て投げ入れられる。交換規則によって再配置された空間が、「生活する私」に再分配されるのだ。この剥奪された空間を交換規則の圧政から解放し、それらの空間を「生活する私」の視点からいかに再編成し直すかが今問われている。そしてそれは不可能ではない。というのも、人間が作り出した第三の超可塑空間は、人間が作り出している以上人間の手で変えることができるのだから。

インターネットと携帯電話とテレビを半日見ないで過ごし、その代わりにこの本の全頁を一字一句貪るように、ゴミを漁るように読もう。その半日であなたの人生は変わる。そのときあなたはすでに、ネオリベの暴力に自らの身体と感覚であらう戦士となっているはずだ。

……本橋哲也「ユートピアを語らねばなにも始まらない」(『増補 ネオリベ現代生活批判序説』書評)『週刊金曜日』2008.5.16

チグハグな歩みのなかで

桑田禮彰 入江さん自身が「全体としてぎくしゃくした歩みになる」といっていますが、分離のなかに接合をみてとり、接合のなかに分離をみてとる、という跛行的な、チグハグな歩みがあります。そしてそれは当然のことだと思う。今日の分断と統合にたいして違和感を表明し、さらには別様の接続と切断を示して揺さぶりをかけているのですから。

土屋進 文化とは既存の関係をどのように再組織化するかです。『ネオリベ現代生活批判序説』で榎村愛子さんも示唆していますが、そうした再組織化はシニフィアンの方にやどる。生活が希薄化する資本主義の新段階において、このシニフィアンの力としてのチグハグな歩みそのものが抵抗となります。

永田淳 そのなかで、サンディカとユートピアが改めて召還される。いまの状況が1848年の『共産党宣言』以前に比すことができるとすれば、初期社会主義の活力が回帰しているともいえるのではないか。そしてその活力のなかで表現が回復していくのではないか。

吉田秀登 入江さんの本には読む快楽があります。詩のような、とでもいうのでしょうか。編集者としては、「サンディカ」という言葉には、意味がすぐ分からないというリスクがある。しかし、巨大化した組合組織がときに労働者を抑

圧した苦い経験をふまえるなら、「サンディカ」という古くて新しい言葉には必然があると思います。

書物という都市に住みつ

ナニボウ 働いていても、排除はふつうにあります。それで、渋谷を舞台にアーティストと野宿者が共闘する「246 表現者会議」にかかわりながら、都市における排除と表現についてあれこれ考えていますが、入江さんの本は、労働や社会の問題が表現の問題とつなぎ合わされていて、とても参考になります。

岡山茂 書物を読むことは、いまだ住んだことのない都市に住むようなものです。入江さんの本は試行錯誤が繰り返されて、ときに途方に暮れたりすることもあります。この都市には旅行者ではなく、滞在者として住みついてみたいという気になります。

そこに住むことでどのような風景が見えてくるのか。資本と大学をどのように結婚させるのか。これはデリダの『条件なき大学』(西山雄二訳・解説、月曜社)の中でも仮構されていることですが、大学の核心には、人文学的な知というかたちで、そうしたユートピア的なイマジネーションがはらまれています。それを解き放つのが「大学への信」ではないか。

『エロディヤードの婚礼』という、マラルメ



2008.4.26 第63回例会

の未完の叙事詩があります。そこではエロディヤードというひとりの女性のなかに、宗教性を脱構築されたマリアと、ヨハネの首を求めたサロメとが統合されている。おそらく大学は、このサロメ=マリアのように、切り落とされた資本の首と結婚すべきなのでしょう。大学は資本や宗教から離脱しつつ、それらを取り込むようなイマジネーショナルな知がはたらく場所であり、それは書物という都市に住みつくことからしかはじまりません。(構成=白石)

われわれがこう、語り合ったり、愛し合ったり、座ったり、テレビ見たり、タバコ吸う。そういう夜の時間が主だと思えます。その残余として、労働がある。だれもがやっていることの残余として、プライベートな、私的な営利活動がある。それぞれのプライベートがあつて公園に出掛けるのではない。そうではなく、公園があつて、プライベートがある。根本的な共にあるという状態からさまざまものが発生する。人間に共通の自然というものが言語や情動あるいは身体であるとすれば、それは夜の閑暇にやどるものだと思います。…この普遍的な閑暇こそがデモクラシーの賭け金です。

(『増補 ネオリベ現代生活批判序説』所収、白石「学費0円へ」p. 292)

路上・書物・刻印

■■ ナニボウ (ミュージシャン)

カリフォルニアのとある一角。「あらゆる漂流物が海に流れ出す場所」と言われた通称「DOG TOWN」。60年代は商業的盛隆を誇ったものの70年代の初めには不良がサーフィンすることで有名になった廃墟と化したビーチ。この地にジャンキー、サーファー、アーティストが集まって独自の文化を形成した。ローライダーなどのカスタム・カー、グラフィティ、ストリート・ギャング、サーフボードのデザイン。そんな場所のサーフ・ショップで「Z-BOYS (ゼファー・ボーイズ)」——人種も年齢もバラバラの子供たちによるスケートボードチーム——が結成される。彼らは路上、人の家のプール、学校の校庭で、自分たちの技を磨く。サーフィンのスタイルで地面を這うように滑走ランプを高く飛ぶのだ。彼らは自分たちの技を磨くときに「刻む」といった。75年、Z-BOYSがスケートボードの大会に出場することを発端に、それ以後スケートボード界は一変する。彼らの中の幾人かに商業的成功と挫折が訪れるがそれ自体は重要でない。ドキュメンタリー映画『DOG TOWN & Z-BOYS』の中で起こっていることは、Z-BOYSが既存のスケートボードの常識の歴史の上に垂直に跳び立てたということだ。

なるほど『眠られぬ労働者たち』には、現在の日常に垂直に飛び立つための理論が記されているようだ。それに著者の文章は、ときに感情が渦巻き空間を演出するセンテンスの波、引用のひとつひとつによって、サーファーがチューブの中で感じる詩的感覚を、Z-BOYSが地面を滑走することで「刻む」感覚を思い起こさせる。マジで、Z-BOYSのような、あらゆるユース・カルチャーを引き受けようとするものは、この本の中に入っていきだろ。

組合と個人

■■ 永田淳 (早稲田大学生協コープブラザブックセンター)

組合(サンディカ)は、当初その発明に賭けられていたものが押しつぶされ、むしろそれを笑う者たちの装いとなって長い時間が過ぎた。サンディカであったなら、神秘的ともいえる集団的創造に驚き、集団であることそのものを肯定しただろうが、いつからか質上げを経営者に相談するような、個人(ベルソス)の権利を調整したがる諸官僚になってしまった。

しかし、情動に動き、止めることができない身体に気づくなら、あるいは毎日役を換える子ども(きょうは何になるのかなあ)を見れば、(ひと)は人格(ベルソス)に収まるものであるはずがない。われわれは夜を徹しても踊ってしまう(我を忘れて)、子どもは虚構を現実とする(わたし? それなあに?)。F.ガタリが「コギト以外の存在の仕方は意識の外に基礎を置く」と簡単に示すように、(ひと)は否応がなく非-人称であり前-個人なのだ。にもかかわらず、いたるところから聞こえる人称化せよ! という命令がうるさい。人格=個人の確定こそ自由の条件と考える英雄的な良心は、道徳の裏返しにすぎないし、良心の個人を守るという組合——守護の女神アリアドネのように——は、警戒と監視の糸を(ひと)につなぐものであるというのに。

監視下にあるサンディカを入江公康は不定冠詞で呼び起した。サンディカは、固定されたベルソスを拒否するとき不定冠詞で呼ばれるだろう。特異でありながらかつ集団であるそれは群集に他ならない。そして入江は、根本的な非-人称の肯定=エクリチュールに社会学を賭ける。それはなにより群集の中の社会学であり、サンディカを生んだその黎明期にさかのぼり、非-人称の社会学を引き継ぐことだろう。われわれにとってなんて悦ばしいことだろう! 人格の自由の祝祭より楽しい、新しきサンディカの思考が可能となるのですから!

「埼玉大学事件」その後

『ネオリベ現代生活批判序説』は、国立大学法人化、特に埼玉大学で起きた非常勤講師大量解雇事件を契機にして生まれた書物である。私達はこの一見些細な事件の背後に、教養や学問を含め生存そのものを市場に投げ込む「ネオリベ」的潮流が日本を席卷しつつある兆候をかき取ったのだ。

最近になって、その埼玉大学でもう一つの「事件」が起こった。

同大学のネオリベ化を進めた張本人である田隅三生学長(当時)が、2007年秋の学長選で、自らに有利な制度改正を行ったにもかかわらず投票総数で2割しか集められず惨敗したこと。そしてこの間、学長権限の乱用によって学内に一種の恐怖政治をもたらしてきた田隅体制の最大の批判者にして犠牲者である岬嶋夫名誉教授が同氏と埼玉大学とを相手取って埼玉地裁に裁判を提起したことである。

岬嶋名誉教授は、2003年11月の学長選における対立候補の一人で、同選挙においては、田隅候補のそれまでの施策を大学改革への理念に欠けるとして激しく批判した。これに対して田隅氏は、岬嶋名誉教授への「報復」として岬嶋氏から名誉教授称号を「剥奪」しようと企て、その前段として、岬嶋氏が参加する学内研究プロジェクトの取り消しと研究室の封鎖を強行し、あまつさえ、氏の長年にわたる研究情報・資料が詰め込まれたパソコンなど研究機材一切を「窃取」し、勝手に廃棄して

しまったというのだ。

そしてこの前代未聞の珍事に、経営評議会や教育研究評議会など、学内組織はほとんど反対の声を揚げることもなく、前学長の暴挙を追認してきた。公判は本年4月23日に始まったが、大学と前学長は同じ弁護士を立てて争う姿勢を見せている。

問題は、これが単に一地方大学で起こった偶発的な事件ではないということだ。国立大学法人化のもと、学長権限の著しい強化により、学内運営の中核であった評議会一教授会は単なる諮問機関にすぎなくなった。岬嶋事件はこうした大学運営の中央集権化によって初めて可能になったのである。非常勤講師の大幅削減も、「学長のリーダーシップ」によって可能になった「大きな改革」として内外に喧伝された。

究極のマクドナルド化に抗して

大学の法人化＝ネオリベ化は学内の風景を一変させた。学生というお客様を集めるため、大金をかけて学校施設は改装され、学内にコンビニが開店し、大学ロゴが作られた。その一方、企業コンサルの主導のもと、コール・システムを用いたTOEIC対策授業ばかりが重視され、教養・語学教育はドラスティックに削減された。人気のある授業は「くじ引き」に当たらなければ受けられないという有様だ。

「市場原理主義政策を通じた階級権力の再編」——デヴィッド・ハーヴェイは、ネオリベリズムをこう分析している。小泉政権下で行われたネオリベ構造改革は、「民営」化のかけ声とは

裏腹に、まさしく、日本の「エリート」官僚権力の強化を全体化した。大学の法人化も、競争原理によって、大学経営・研究・教育の高能率化をもたらすと喧伝されたが、内実は文科省の強力な縛りをうけ(中期業務計画)、教員は研究時間を削って官僚に「評価」してもらうための「書類」作りに追われている。大学法人化は、官僚達に大量の天下り先をも提供した。大学の役員になれば年収一千万数千万。非常勤講師のべ数十人が雇える額だ。非常勤講師への置き換えや、任期制、定年前倒しなどによって非正規化の進む教員が一生身分を保障された官僚・事務方に支配され、大学における研究の自由が奪われていく。誰もそのことに抵抗しようとしな。

日本は世界でも著しく私立大学が多いことで知られるが、その運営は、大量の非常勤講師というパート教員の存在抜きには語れない。運営費交付金の削減を求められている大方の国立大学は、いずれ、私立大学化の道を歩まざるを得ないだろう。私立大学とは、あえて誇張すれば、店長のみが正社員で、店員は非正規雇用、もうかれは新しい店舗＝新学部・校舎が増設されるという、究極のマクドナルド化を突き進んでいる業種。高額な学費と引き換えに売られているのはジャンクフードと化した学問というわけだ。

最近翻訳のでたジャック・デリダの『条件なき大学』の例をひくまでもなく、日本の大学がどこかどつともなく「おかし」方向に進んでいることに、そろそろ気づいてもいい頃ではないか? 埼玉大学における新たな「事件」が、よりよい方向への一歩となることを祈らざるを得ない。

大学の現場から……「他者を愛するように自己を愛する」ことを忘れた

生江明(日本福祉大学教員/社会開発)

“基礎学力の低下”が喧伝されている。それは非正規労働雇用の正当化へ、他方では、「懇切丁寧な」個別指導・教育の蔓延へと連なっていく。「根拠」は「対策」を正当化し、「対策」は成果を求め続ける。「成果=output」を示すことができない時、「指導係」の力量が迫られる。これら全体を鑑する時、この社会全体の“基礎学力の低下”が理解できる。これは子どもたちや学生たちの話ではない。大学を含む“おとなたち”の“基礎学力”の状況であり、そのメカニズムは、入江氏が言うようにLIC(低強度戦争)/RMA(軍事革命)が示すものである。すなわち、“敵・対象”の無力化・“烏合の衆”化を通じた自己権力の安定的確立である。

期待し、予想しえるoutputを増すためにinputを増し、他方で加工対象を

コントロールの下に囲い込むことで、in-outの差=“無駄”を極小化しようとする。その成功の暁には、均一のoutputの出現数とその増加を誇ることになる。目指すは大学/社会の自動販売機化であり、コントロールしえないエネルギーに満ちた場の形成ではない。

敵対的あるいは非同調の不純物を排除した絶対権力完成の時、そこに現出する代物はマザーマシンを越えることのないコピーであり、それが退屈なものであるなら、“基礎学力の低下”、“モチベーションの低下”とは、現代に次世代が突きつける“生産現場”の放棄という“真つ当な判断”であると見てみよう。すると、そこに現前化する世界は、ぶつかりあう時代(サンディカ)の角錐の場にあることを知らないまま眠っている大学の姿であり、計画実施の直截的なコントロールの下に他者を置くことで計算外の事態を極小化し、障害物(ひと、もの、情報)の無視・排除を正当化する“自己中”世界の衰弱した姿である。「他者を愛するように自己を愛すること」(H.アーレント)という彼女の言葉が胸に響く。

状況雑感

40年後のソルボンヌ

岡山茂(早稲田大学教員/文学)

ソルボンヌは街路に面しており、中庭が広場のようになっている。しかしその巨大な建物には通常開いている入り口は一つしかなく、そこに何人かの警備員が立って通行許可証をもつ者以外を排除している。学長(ジャン＝ロベール・ピット)は構内の大理石造りの廊下をファッション・ショーに貸し出す一方、政府による一方的な大学改革に反対する教員団体(「研究を救おう!」)が製作したビデオ(『大学、大いなる夜』)の上映は禁止するような人物である。

アレゼール(ARESER: 高等教育と研究の現在を考える会)はこの上映禁止に抗議するため署名運動を起こした(La petition de l'ARESER contre la censure en Sorbonne 2008年12月12日まで)。ビデオにはクリストフ・シャルルやフレデリック・ネイラも出演している。「意見が異なるからといって議論を許さないのは驚きである。しかもそれが学問の自由を保証することを委ねられた学長によってというのはさらに驚きである。大学、とりわけソルボンヌが、何世紀も前から自由な表現と論争の場であったことを喚起する必要があるか。この原則は、ヨーロッパの学長たちが署名している『大学憲章』La Magna charta universitatumでも確認されている」と呼びかけ文にはある。

大学のキャンパスはヴァーチャル化している。かつての痕跡は消し去られ、「よそ者」はその中に入りこめなくなっている。しかしそこに「場を持つ」(出来事を起こす)ことを欲する者たちがまだいることは確かである。「公言と労働のあいだにいかなる関係があるのか。大学ではどうか。人文学ではどうか」(デリダ)。「フランスの大学は抵抗の文化を忘れていなかった。ぜひ声援を送りたい。そして日本でも」(入江)。

編集後記▶ドニ・プロ『崇高なる者』(見富尚人訳、岩波文庫)を読み返す。パリの「たらい」の底には「崇高(シュプリム)」と称する労働者たちがいた。「真の労働者」は年間300日以上働か、「真のシュプリム」は多くて170日。夜ごと居酒屋に入り浸る。そして「民衆の連帯」を語る者は「シュプリムの中のシュプリム」と呼ばれていた。1870年、コミュン蜂起の直前である▶悲しみや喜びという感情の動きによって、社会的なヒエラルキーは意味をなさない。言葉ともの、精神と身体との分割すら揺るがされる。この情動のデモクラティックな横断性こそ崇高であり、蜂起した労働者の名でもある▶大学、大学、大学……。われわれはなぜ大学を語らなければならないのだろうか? カントが崇高を論じたのみならず、近代の大学を構想したことを思い起こそう。さらに、そのカントを踏み越えるデリダの「条件なき大学」を。賭けられているのは、大学の概念そのものである。文学や哲学と同様、大学は制度を指すだけではない。それは学生と教員の群衆状態であり、そこには「崇高」で「条件なき」デモクラシーへの信がやどる。そして、この大学を生起させるのが「明日の人文学」にほかならない。さいごに、本誌のために新たな表題部を作成してくれた永田氏に感謝。書物と労働を横断する営みの兆しを読みとりつつ。(白石嘉治 上智大学他教員/文学)